

# 経済・金融 フラッシュ

## 5月マネー統計 ～銀行貸出はじわり持ち直し

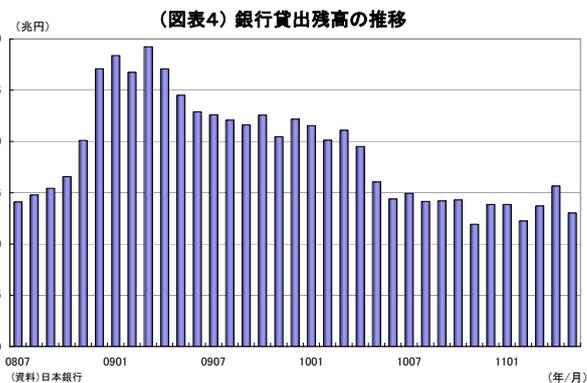
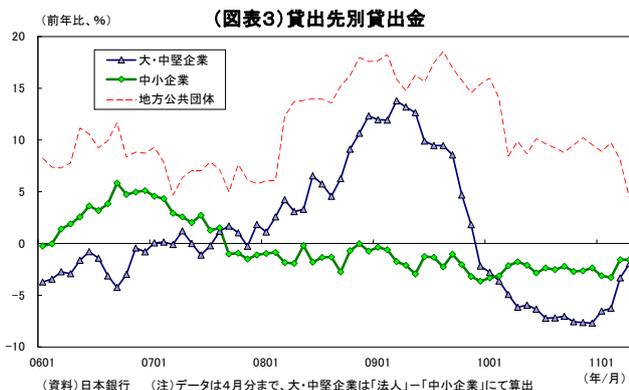
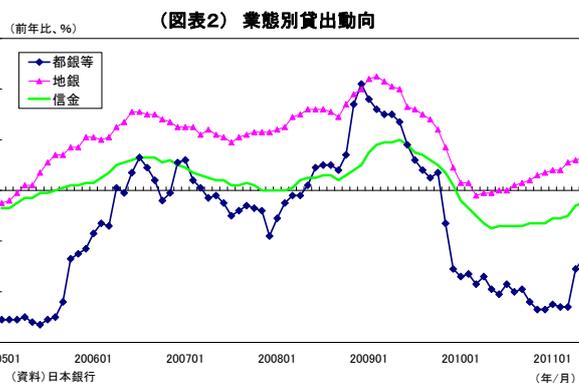
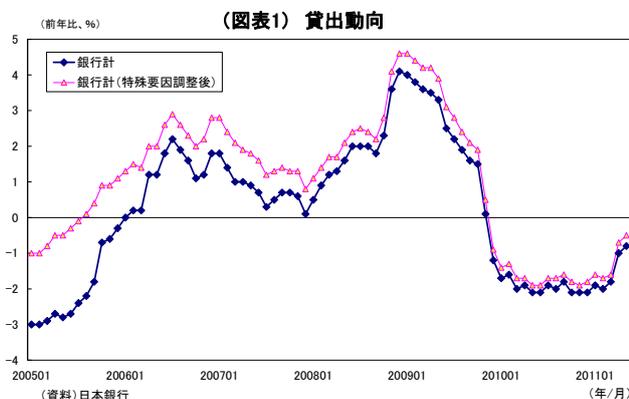
経済調査部門 シニアエコノミスト 上野 剛志  
TEL:03-3512-1870 E-mail: tueno@nli-research.co.jp

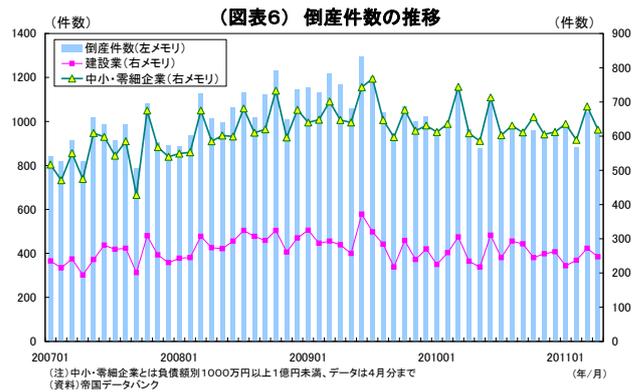
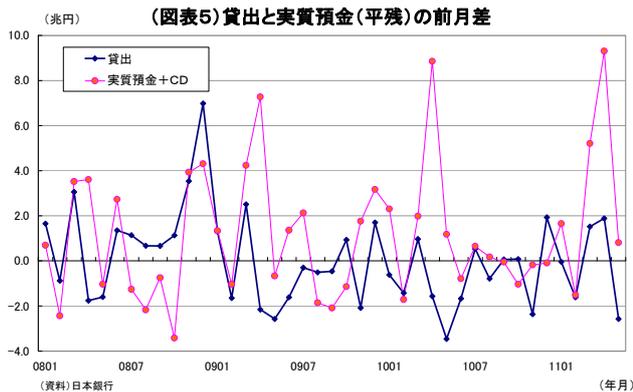
### 1. 貸出動向： 銀行貸出残高は対前年▲0.8%

日銀が発表した貸出・資金吸収動向等によると、5月の銀行総貸出(平残)の前年比伸び率は▲0.8%(前月は▲1.0%)と震災以降3ヶ月連続でマイナス幅が縮小した。マイナス幅は2009年11月(0.1%増)以来の小幅となっている。内訳では、都銀等が前年比▲2.7%減(前月は▲3.1%)、地銀が同 1.3%増(前月は同 1.2%増)と、都銀等におけるマイナス幅縮小の動きが顕著だ(図表1～4)。

この持ち直しの動きは震災後の緊急融資や企業の運転資金確保の動きを反映したものとみられ、銀行貸出のトレンド自体が増加に転じたとはまだ言い難い。今後の復興の動きの中で、「設備投資マインド、住宅取得マインドが回復するか」、「日銀の資金供給制度など政策効果が出るか」が注目点となる。

なお、預貸バランスについて、季節要因を考慮せずに貸出金・預金等の前月差を見ると(図表5)、貸出残高が前月比▲2.6兆円の減少となった一方、預金等は前月比0.8兆円増加しており、銀行システム全体としては、今のところ資金需給に特段逼迫感はないものとみられる。





### (日銀の成長資金供給制度)

日銀による「成長基盤強化を支援するための資金供給」(研究開発や環境などの分野への投融資に取り組み金融機関に対して、日銀が年 0.1%の低利で資金を供給するもの)の第4回目が5月末に実施された(実際の資金供給は6月上旬)。今回の貸付額は 8296 億円と前回(2月)から 15%増加。一部大手行では既に1行当たりの上限(1500 億円)に達しているため、大手行への貸付が約2割減少する一方、地域金融機関(12.3%増)、その他(約3倍)向けが増加した(図表7)。

今回の対象は、1~3月に実行された 126 金融機関の投融資 9486 億円。対象投融資の分野別投融資額は、最大の環境・エネルギー分野が全体の3割を占め、医療・介護が2割弱で続き、前回同様、両方で全体の半分弱を占める(図表8)。

同枠組みは12年3月の期限まで四半期に一度実施される予定(資金供給実行期限は同年6月末)だが、既に累計額は 2.94 兆円と資金枠3兆円にほぼ達している。来週の決定会合にて、資金枠拡大の検討が行われる予定だが、①被災地復興支援との関係、②同制度が貸出金利の引下げ競争を助長しているという批判への対応から、単純に資金枠を拡大という形で収まるかは流動的。

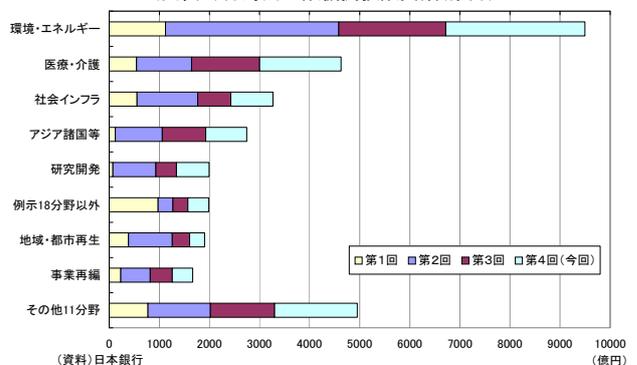
なお、日銀は同制度のほか、震災を受けて「被災地金融機関を支援するための資金供給オペ」を開始、5月23日に第1回分 741 億円の貸付が実行されている。

(図表7) 成長基盤強化のための資金供給 結果概要

	貸付 予定額 (億円)	大手行 (億円)	地域金 融機関 (億円)	その他 (億円)	貸付先 金融機 関数 (先)	対象 投融資 額 (億円)
第1回(2010.9)	4625	3204	1166	255	47	4788
第2回(2010.12)	9983	5987	3607	389	106	10564
第3回(2011.2)	7221	2627	4052	542	122	7806
第4回(今回)	8296	2125	4551	1620	126	9486

(資料) 日本銀行

(図表8) 分野別金融機関投融資額(累計)

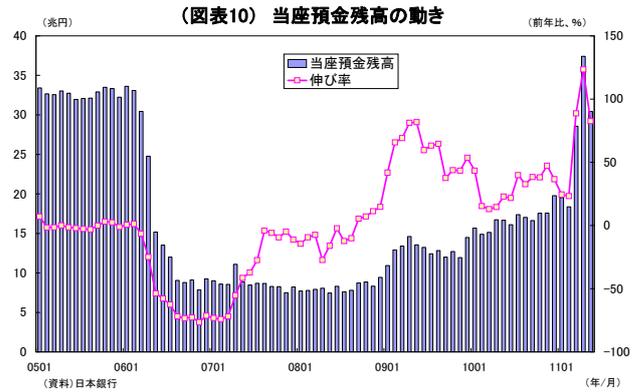
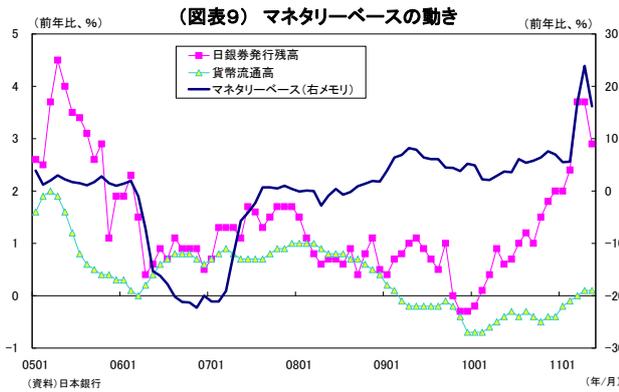


## 2. マネタリーベース：日銀当座預金は減少へ

日銀による資金供給量(日銀当座預金+市中のお金)を示す5月のマネタリーベース(平残)の伸び率は前年比16.2%と前月(23.9%)を下回ったものの高い伸びとなった。残高も114兆円と過去最高であった前月(122兆円)からは減少したが、過去2番目の高水準。

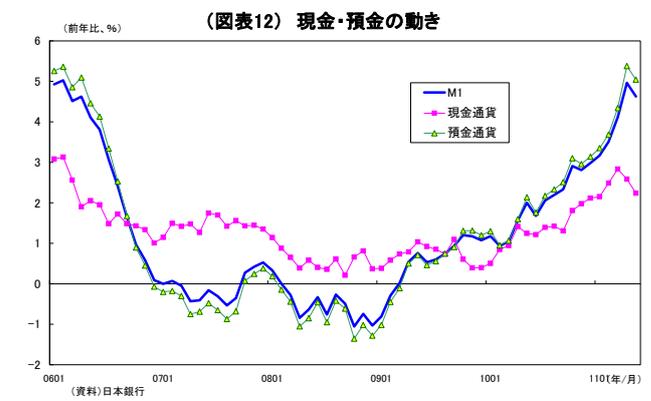
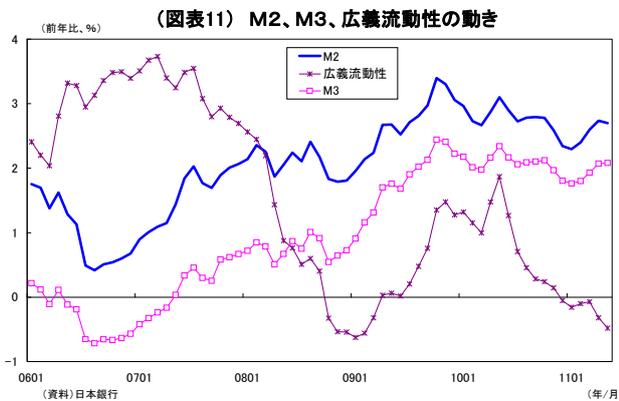
内訳では、日銀当座預金が対前年82.5%増の30.4兆円。日銀当座預金(平残)は、日銀が震災後に金融市場安定のため資金供給を大幅に上積みしたため、4月に37.4兆円と震災前の20兆円弱から倍増、その後は市場の安定化に伴い徐々に減少しているが、依然として平時を上回る(図表9,10)。

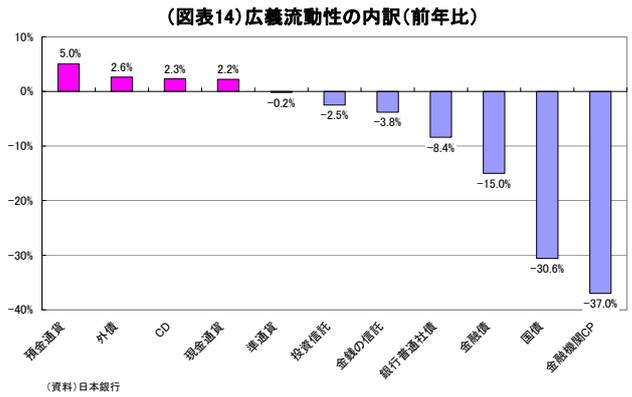
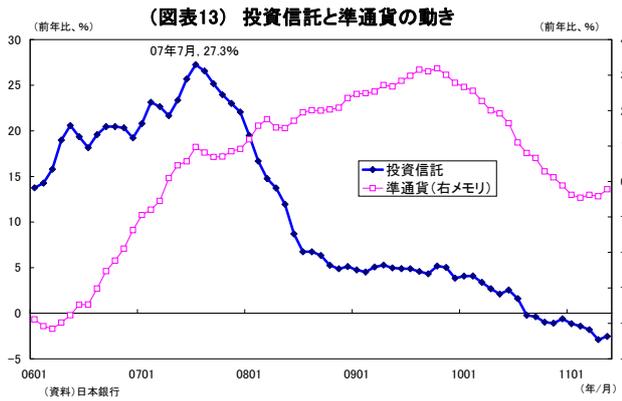
今後とも徐々に残高を戻していくとみられるが、潤沢な資金供給スタンス自体は維持されるとみられ、マネタリーベースは高い水準で推移すると思われる。



## 3. マネーストック：流動性資金への集中は一服

通貨供給量の代表的指標である5月のM2(現金、国内銀行などの預金)平均残高は前年比2.7%増(前月も同じ)、M3(M2にゆうちょ銀など全預金取扱金融機関の預貯金を含む)は同2.1%増(前月も同じ)となった。依然として高い伸び率を示すものの、上昇は一服。一方、M3に投信や外債などを含めた広義流動性は同▲0.5%(前月は同▲0.3%)とマイナス幅がやや拡大している(図表11)。





広義流動性の前年比内訳を見ると、預金通貨(当座・普通預金等)が前年比 5.0%増、現金通貨が同 2.2%増と、それぞれ前月の 5.4%増、2.6%増をやや下回っている。震災から約3ヶ月が経過し、リスク回避姿勢は依然として高いものの、流動性シフトの動き自体は落ち着いてきているようだ(図表 12~14)。

(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。